

国

語

●満点100点 ●時間50分

一 次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 山頂から朝日に輝く雲海を眺める。
- (2) 他校の生徒会役員を招いて懇談する。
- (3) 展覧会に出品した絵を先生に褒められる。
- (4) 氷上の華麗な舞いに、観客の拍手が起る。
- (5) 入学式を前に、新しい制服をハンガーに掛ける。

二 次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書かいしよで書け。

- (1) 親友と将来のユメを語り合う。
- (2) 高原の牧場で、新鮮なギューニユウを飲む。
- (3) 幹線道路をチュウヤの別なく車が行き交う。
- (4) 長年の努力が、実験を成功へとミチビいた。
- (5) 発表の資料を作るために、図書館で文献をフクシャする。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

小学校五年生の島村千恵は、ふだん行き来のなかった祖父のエンジ(圓治)の家で夏休みを過ごすうちに、自宅に帰りたくなくなっていった。千恵の気持ちを察したエンジは、千恵が夏休みの間、少しでも長くとどまれるよう、その口実を作るために、道具箱を階段の上から投げ落として大きな音を立て、自分が階下に落ちて膝ひざにけがをしたふりをしていった。

しばらくして、エンジは板塀を直した。あの道具箱から、ノコギ

りやら＊ゲンノウやらを出し、木を切ったり、釘くぎを打ったりした。あつという間に、ぼろぼろだった板塀は、立派になった。

「これでまあ、あと十年は平気だ。」

エンジは得意気に笑った。いつかエンジは言っていた。塀より自分の方が先にいってしまうから直さないのだと。なのに、どうして直す気になったんだろう。

やがて夏の終わりがやってきた。千恵が世田谷せたがやに帰る日だった。

エンジの膝は治った——ということになっていた。電話してみたところ、＊美紀ちゃんみきちゃんは旅行に行っていて会えなかった。千恵は＊例の壁画のところに向かい、壁に描かれた切れ長の目の美紀ちゃんに言った。

「さよなら。」

またね、という言葉は足すかどうか迷ったけど口にできなかった。なぜだろう。

「さて行くか。」

そう言ったエンジは、いつものダボシャツとステレコではなく、透かしの入った服と、濃紺のズボンをはいていた。エンジがそんな格好をしているのは初めて見た。千恵はびっくりした。

「え、なんで。」

千恵は尋ねたけど、見当違いの言葉が返ってきた。

「いや、あるいはばっちりだったのか。」

「永代橋えいたいばしを渡りたいんだろう。」

「あ、うん。」

「一回くらい渡っておいても損はないな。ありや立派なものだ。橋の向こうも、どうせ同じ地下鉄だし。」

(1) 「エンジも渡るの。」

「そうさな。」

エンジは、しばらくのあいだ、考える振りをした。

その気持ちは明らかなのだが。

「まあ渡ろうか。」

「向こう岸に行ったことあるの。」

「そりゃあるさ。」

ぐずぐずしている千恵を促したのは、エンジの方だった。

「忘れ物はないか。」

「うん。」

「じゃあ行こう。」

エンジはいつもの散歩道を通った。永代通りを真っ直ぐ歩いた方が早いのに。裏道を行き、倉庫の角を曲がった。自然と千恵の足取りは遅くなった。(2) 少し歩くごとに、エンジは待っていてくれた。

「いつでも来られる。」

エンジは言った。

「*シゲが調べてくれたんだ。」

「え、なにを。」

「清澄白河駅なら一本だ。」

千恵の住む世田谷と、エンジの住む深川は、直通電車がある。地上線と地下鉄だけど、繋がっているのだ。

「そうだね。」

なぜ、そのとき、胸が痛くなったんだらうか。

「すぐだよね。」

やがて永代橋にたどり着いた。太陽はビルの向こうに沈んで、その輪郭だけが光っていた。

橋の手前で、エンジは立ち止まった。

(3) 「行こうか。」

「うん。」

「渡るぞ。」

なかなか歩き出さない。しかし最初の一步が伸びると、あとはス

ムーズだった。いつしか、千恵はエンジと手を繋いでいた。エンジの手は大きくて、ごつごつしていた。硬かった。

「手、硬い。」

そう言うと、エンジは笑った。誇らしげだった。

「職人だからな。」

空いている右手で、千恵は永代橋の欄干に触ってみた。たくさんのでこぼこがあつて——リベットというのだとエンジが教えてくれた。——それに触れるたび、頭ではなく、手のひらが膨らみを記憶していった。この感触は、ずっと残る。そう思った。頭で覚えたことは忘れてしまうかもしれないけど、体で覚えたことは決して忘れないだろう。

「気が向いたら来い。」

「うん。」

「気が向かなかつたら来なくていい。」

「うん。」

(4) エンジは少し、躊躇った。言葉が残っているのがわかった。

迷った末、千恵は尋ねた。

「なに。」

エンジはしばらく答えず、ただ橋を渡った。永代橋はぐんと天に向かつて延びていた。とてもきれいだと思った。どこまでもどこまでも登っていけそうだ。向こう岸のビルは、ちらほらと光を灯しはじめていた。まるでキャンデルのようだった。これから、わたしはあそこに行くのだ。

「俺はずっとここにいる。」

エンジは言った。

千恵は頷いた。

「うん。」

どうしたって他の言葉は出てこなかった。エンジと手を繋いだま

ま、千恵は永代橋を渡った。
ビルがぴかぴか光っていた。
風が吹いた。

海の匂いがした。

(5) 千恵はエンジの手を、強く、強く、握りしめた。

〔注〕 ゲンノウ——かなづち。

美紀——千恵がエンジの住む深川で知り合った同じ年の女の子。

例の壁画——美紀が卒園記念に描いた自画像。

シゲ——美紀の祖父でエンジの古くからの友人。

(橋本 紡「永代橋」による)

〔問1〕 (1)「エンジも渡るの。」とあるが、このときの千恵の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 一人だけで大きな永代橋を渡ることを心細く思い、エンジに橋の向こうまで連れ添ってくれるように頼もうと思っている。

イ 家に帰る日になってようやく願いがかなわない、エンジが立派だと言ふ永代橋を、一緒に渡れることを誇らしく思っている。

ウ 永代橋を渡れることをうれしく思い、エンジも一緒に行ってくれるのを分かりながらも、さらに確かめようと思っている。

エ 深川を離れることを実感して寂しく思い、渡りたかった永代橋に、せめてエンジと一緒に行ってくれないかと思っている。

〔問2〕 (2) 少し歩くごとに、エンジは待っていてくれた。とあるが、この表現から読み取れるエンジの様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア その場を去りがたそうな千恵の気持ちを察し、名残を惜しませてやろうとさりげなく気遣っている様子。

イ 思い出深い町並を歩いているうちに、千恵が家に帰りたくなるのではないかと不安に思っている様子。

ウ ゆっくり歩きたがる千恵の気持ちを理解しながらも、早く家

に帰るように促そうかと迷っている様子。

エ 遠回りをしていつもの散歩道を歩くことで、少しでも長く千恵と一緒にいられることを喜んでいる様子。

〔問3〕 (3) 「行こうか。」「うん。」「渡るぞ。」とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 力強く励ますエンジの様子と沈みがちな千恵の様子とを、二人の言葉を描き分けることによって対照的に表現している。

イ 迷いを振り切るように永代橋を渡ろうとしている二人の様子を、短い言葉を重ねることで印象的に表現している。

ウ 永代橋を渡ることを決心するまでの二人の様子を、その場の会話を順序立てて描くことで説明的に表現している。

エ 渡りたかった永代橋を前にして勢い込んで二人の様子を、生き生きとした会話によつて躍動的に表現している。

〔問4〕 (4) エンジは少し、躊躇った。とあるが、エンジが「少し、躊躇った」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分の本意ではないことを言ったにもかかわらず、千恵があつさり同意したのでその本心を問いただそうかと思つたから。

イ 千恵に言ってしまった言葉を付け足し、自分のところにいるでも来られるということをおうかどうかと思つたから。

ウ 千恵が意外な受け答えをしたので、自分の本当の気持ちがあつたく伝わっていないように感じて心外だったから。

エ 帰って行く千恵に自分の思いを伝えたが、続けて本心をもも理解してもらえないかどうか不安に思つたから。

〔問5〕 (5) 千恵はエンジの手を、強く、強く、握りしめた。とあるが、あなたが千恵だとして、このときの気持ちをエンジに伝えるとしたら、どのように言うか。あなたの話す言葉を五十字以内で

書け。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

四

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

餌を求めて一斉に巣から出発した働きバチは、蜜を見付けると、「8」の字を描くように旋回し続ける。すると付近を飛んでいた仲間のはちは、一斉に「8」の字のパターンを描いているハチのところへ集まってくる。この場合、「8」の字のパターンは、「餌がここにある。」ということの意味する記号の役割を果たしており、そのメッセージを解読した仲間には、いち早く餌のあるところが集まることになって、餌を探索する手間を大幅に短縮し、労働の効率をあげることになる。これは、動物の間で様々なコミュニケーションと、それに基づく合目的な協業のほんの一例にすぎない。(1)その限りにおいて、記号を用いたコミュニケーションを通じて協業するということは、なにも人類の専売特許ではない。にもかかわらず、言語を用いた人間のコミュニケーションは、記号による動物のコミュニケーションには重要な特質がある。(第二段)

ミツバチは、蜜の存在に気付いたら、8の字の飛行を始めるわけではない。動物のコミュニケーションにあつては、ある対象(蜜)に接したことが原因となつて、その結果として必然的に、それを指示する記号の役割を果たす行動が生じる。そして、仲間のそうした行動に接したなら、そのことが原因となつて、それに反応する行動が生じる。ここには、飛んでいる虫が光源に向かって旋回しながら近付いていくのと同様の、因果関係(原因と結果のつながり)があるにすぎない。長い進化の過程で、彼らには、一定の対象を認知したら、ある定まった行動をするというプログラムが*インストールされており、動物における記号的行動もまた、そうしたプログラムに従つて、言わば自動的に生じる。蜜が存在しないのに8の字の飛行を始めたたりすることはない。つまり、動物は、うそがつけない。この点で動物は、人間とは根本的に異なっている。したがってまた、動物

の記号的なコミュニケーションにあつては、「相手の考え」、「相手の意図」という概念は登場しない。コミュニケーションが、記号の役割になう行動と、それへの反応との間の因果関係によって成り立っている限り、そこには、そのように体を動かした相手の思いや意図を推測する、というプロセスが介在する余地はない。(2)この点でもまた、動物のコミュニケーションは、人間のコミュニケーションとは根本的に異なっている。(第二段)

そもそも動物の記号は、語を組み合わせた文ではない。なるほど、「文」という概念を使って説明するなら、ミツバチの8の字飛行という記号は、「蜜がここにある。」という文を省略した一語文であり、群れの端にいる個体が発する天敵の警戒記号は「敵が接近中だ。」という一語文とみなすこともできる。しかし、動物のコミュニケーションで用いられる記号は、パーツを組み合わせて作られた文ではないし、また記号をさらに組み合わせ、新たな記号列が作られることもない。(第三段)

ところが人間の言語は、そうではない。なるほど、「テキ」という語は、敵を指示しはする。しかし、単に「テキ」と呟いただけでは、いまだ確定した意味をもちえない。「いる／いない」、「来る／来ない」、「多い／少ない」という別の語(述語)と組み合わせられて文が形作られたとき、「テキ」という語は、初めて確定した意味をもつ。すなわち人間の言葉は、文というまとまりの中で、初めて確定的な意味をもつ。(第四段)

しかるに文というまとまりは、人間の言語においては、語を自由に組み合わせ、任意の文を作ることができる。その結果、実際には起きていないことを述べる文も、次々に作ることができる。いま一頭の小ぶりの天敵が近付いている、としよう。このとき、「テキ、いない」、「テキ、多い」、「テキ、大きい」といった多くの文は、すべて偽となる。これらの文は、目下の状況では偽である。しかし、

私たちは、それらの文の意味を理解できる。それはほかでもない、それらの文が真となるような状況を考えることができるからである。このように私たち人間は、語を自由に組み合わせ、任意の文を作りうるがゆえに、実際には起きていないことについて考えることもできる。いや、考えざるをえないのである。「果実」という語と「木に生る」という語を組み合わせ、「果実が木に生る」という文を作れば、これは、われわれの世界で真な文だが、「金」という語と組み合わせ「金が木に生る」という文は偽である。しかし、「金が木に生る」という文が意味をもつ限り、「金の生る木」という語も意味をもつ。(第五段)

このように、言語を用いた人間のコミュニケーションにあつては、言葉は、現にないものについてメッセージをつくるためにも用いられる。人間の言葉は、実際には存在しないものを、思考の対象として、言わば呼び出す、という意味で「非在の現前」である。人間の言語は、実際には存在しないものについての思考を可能にし、そうした思考の交換を可能にする。こうした言語によってコミュニケーションが進行することによって、人間の協業の仕方は、動物たちの協業とはまったく異なるあり方をしていく。(3)このことが、人間としての協業の根幹に、極めて固有の刻印を与えている。(第六段)

今、目の前で実際には起きてはいないこと。そうしたものは、多種多様である。しかし、まず第一に重要なものは、もはやないものごと、いまだないものごと、すなわち過去・未来のものごとである。動物は、その時点ごとに外界からの刺激に反応して生きている。彼らは、常に現在を生きているにとどまる。もちろん動物でも過去の記憶は働いている。しかし動物は、「あのとき、こうだったのだ。」と回想したり、「あのとき、ああしていたら、こうはならなかっただろう。」と過去にはありえた可能性について考えることはない。(少なくとも、考えていると言えただけの証拠はない。)(第七段)

未来に關しても、同様である。動物も、未来を予知する働きをもつてはいる。しかし、そうした予知は、ちょうど秋の深まりいく気配に接したら冬眠の準備行動が始まる、というように、自然の因果関係の「こまにすぎない。そうした動物たちにあつては、日照時間や気温などを通じて秋が深まる気配に接したら、特定の行動プログラムがオンになるのであつて、そこには選択の余地はない。ありうる未来・ありえない未来を想像し、そうした未来のどれかに焦点を合わせて計画を練る、というのは、極めて人間的な働きである。(第八段)

このように「非在の現前」としての言葉を操れることによつて、私たち人間は、過去・未来のものごとについて、共に考えることができる。これができるとおかげで私たち人間は、現在を、過去の選択の帰結としても捉えらるるとともに、そのように捉えた現在において、将来への影響を考えながら、ある選択肢を選びとる。すなわち人間は、動物のように単に現在を生きてではなく、過去から未来への歴史を生きている。(第九段)

(大庭 健「いま、働くということ」による)
〔注〕 インストール——組み込むこと。

〔問1〕 (1)その限りにおいて、記号を用いたコミュニケーションを通じて協業するということは、なにも人類の専売特許ではない。とあるが、ここでいう「記号を用いたコミュニケーションを通じて協業する」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 行動から読み取った仲間の考えや意図に基づき、それぞれがもつ固有の役割を果たしながら協力するということ。

イ 行動の模倣によつて情報の意味を解読することを通して、仲間に合わせて同じように働き始めるとのこと。

ウ 仲間が示す様々な行動の意味を一つにまとめて解釈することを通して、共通の目的を理解できるようにすること。

エ 特定の意味を示す行動によって伝えられる情報に基づき、同じ目的を達成するために仲間とともに働くということ。

〔問2〕 (2) この点でもまた、動物のコミュニケーションは、人間のコミュニケーションとは根本的に異なっている。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 動物は人間と異なり、刺激に対していつも一定の反応を示すことや因果関係に基づいて行動することができないと考えたから。

イ 動物はうそがつかないため、かえって相手の思いや考えを推測して行動するようになるという点において人間と異なると考えたから。

ウ 動物は人間と異なり、事実がないことや相手の思いや意図に基づいてコミュニケーションを交わすことができないと考えたから。

エ 動物は組み込まれたプログラムに従って行動するため、思いやりに基づく行為も機械的になつてしまう点で人間と異なると考えたから。

〔問3〕 第四段と第五段との関係を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 第四段で述べた内容を受けて、第五段ではその内容を発展させた具体例を挙げて説明を加え、論の展開を図っている。

イ 第四段で述べた内容について、第五段ではその根拠となる事例を付け加え、問題解決の手順を示している。

ウ 第四段で述べた内容に対して、第五段ではそれと反する見解を具体例とともに提示し、話題の転換を図っている。

エ 第四段で述べた内容に対して、第五段ではそれとは対照的な事柄を列挙し、一つ一つ詳しく分析している。

〔問4〕 (3) このことが、人間としての協業の根幹に、極めて固有の刻印を与えている。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 人間の思考は、過去や現在の状況に関係なく、常に未来のことのみを考える点に明確に特徴付けられると考えたから。

イ 人間の特質は、過去や未来などの実際に存在していないものについても言語によって思考し、伝達できる点にこそあると考えたから。

ウ 人間の想像は、言語の使用とは無関係に、広く過去から未来にまで及んでいる点が特に象徴的であると考えたから。

エ 人間の能力は、目の前で実際に起きていることや存在していることについて思考するときに、最も強く発揮されると考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「言葉によるコミュニケーション」というテーマで各自が具体的な体験を示して意見を発表することとする。このとき、あなたが話す言葉を二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

〔五〕 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、あとの□の中のBは、本文中の□で囲んだAのもとになる漢文の書き下し文である。（*印の付いている言葉には、本文のあとに

〔注〕がある。）

孔子が呂梁川りうりやうがわにある滝を見ていたときの話だ。

この滝というのは五〇メートルの高さから落ちてきて、すさまじい勢いで流れ下ってゆく――。

魚だって、カワウソだって、棲すみつくどころか泳ぐこともできない。

ところで、孔子が見ているとき、ひとりの男が水のなかに飛びこんだ。

孔子は、弟子たちを川岸に並ばせて、岸から男を引き揚げさせようとした。

ところが男は、一〇〇メートルか二〇〇メートル先のほうで、水面にひよいと出て、岸のほうへと抜き手を切つて泳いで来る。岸に上がって、髪は濡れたままで、のん気に歌を歌いながら歩いてゆく。孔子はその姿に驚いて、追いついて、こう聞いた。

「まあ、君は人間わざじやないことをするね。いったいあの流れのなかで、どうやって浮いていられたのかね？ちよつと教えてくれなにかね？」

「別に特別の方法なんてありませんや。」と、男は言う。

「(1)自分の持っているものだけで、十分なんですよ。」

自分に備わっている性質と体とを、自然の力に任せただけでさあ。自然はね、おれが渦巻の底まで行くと、次には浮き上がらせる力がある。それに従つて動いていけばいいだけで、何か他に考えたりしないのさ。」

A 孔子が言った。

「いったい、自分に自然に備わったものというのは、何だね？ どうも私にはよくわからんのだが、なぜ、自然のままに十分だと言えるのかね？」

「私はね、丘のある土地に生まれ育つたから、丘は安全だと思つている。(2)それに小さいときから水に慣れて育つたから、水を安全だと思つている。これが私のなかに備わつた自然の性質ですよ。」

別に自分のしているのは学んだわけじゃない——。ただ、大きな力に任せて動いているだけさ。」

ここには老子は出てこないが、代わりに老子の思想を身をもって実践している男が登場し、彼の姿を通して老子思想が見事に語られている。

この話を読んで、私は自分が孔子サイドにいるとまず感じた。男のすることは無謀で危ないことだと思ふサイドであり、一般常識人の気持ちだ。

この男の行動に驚いた孔子は「いったいどうやって……。」と問う。私たちも同じ質問をするだろう。

男の答え。——「自分に備わっている性質と体とを、自然の力に任せただけだ。」

孔子が(3)なおも納得せずに「君に自然に備わつたものとは？」と問うのに、男は言う。——「ただ、大きな力に任せて動いているだけさ。」

この言葉には、老子の「無為」の*エッセンスがある。老子の説く、「無為」とは余計なことをするなということだ。それよりも自分に備わつた「自然からの*エナジー」に任せたらいい。困難や面倒ごとに直面したら、なおさらそうしたらいい、と言う。

このエピソードを話すと、私はかならずもう一つ、身近な実際にあつた例を思い出す。

私の住んでいる伊那谷には天竜川が流れている。ある年、カヌー競技の大会があつて、父親と息子が出場した。父親は私の知人で四十前後、息子は小学生だった。コースの途中で難所があつて、父親はカヌーを操るテクニクをいろいろ使つたが、しまいに転覆した。(4)息子はどうするかと見ていると、彼のカヌーは危なげもなく、すいっと難所を乗り切つてしまった。父親が不思議に思つて尋ねると、息子は言った。——「恐かつたから、なんにもしななかつた。」

少年は恐いから水の自然力に任せ、滝の男は水の力と自分に備わる自然の性質を知つて水に任せた。ともに、自然の力に任せたので

あり、その結果を見て、父親と孔子は驚いた。(5) この驚きは二五〇〇年来、すこしも変わっていない。

〔注〕 エッセンス——本質。 エナジー——エネルギー。
(加島祥造「現代人の内なる老子と孔子」による)

B 孔子曰く、「*何をか故に始まり、性に長じ、命に成ると謂ふ。」と。曰く、「吾、陵に生まれて陵に安んずるは故なり。水に長じて水に安んずるは性なり。吾の然る*所以を知らずして然るは命なり。」と。

(遠藤哲夫「莊子」による)

〔注〕 何をか故に始まり、性に長じ、命に成ると謂ふ。——生まれたままから始め、自分に備わった性質を伸ばし、天命に任せるところに完成するというのはいったいどういうことかね。

陵——丘。 所以——理由。

〔問1〕 (1) 自分の持っているものだけで、十分なんですよ。とあるが、「男」のこの発言の意図について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

A 直前の気のない返答に続き、自分の発言に対する理解は得られなくてもよいと相手を軽くあしらおうとしている。

I 直前の発言では相手の反応が得られないことを踏まえ、話題を転換することで関心を引こうとしている。

ウ 直前のぶしつけな返答に続き、相手の納得とは無関係に自分の主張を無理に押し通そうとしている。

E 直前の発言が十分な返答ではないことを踏まえ、相手の理解を得るために補足して説明しようとしている。

〔問2〕 (2) それに小さいときから水に慣れて育ったから、水を安全

だと思っている。これが私のなかに備わった自然の性質ですよ。とあるが、この部分に相当する一文を、Bの書き下し文の中からそのまま抜き出して書け。

〔問3〕 (3) なおもとあるが、これと同じ意味・用法で「なおも」を用いて、二十五字以上三十五字以内で文を作れ。なお、や・などもそれぞれ字数に数えよ。

〔問4〕 (4) 息子はどうするかと見ていると、彼のカヌーは危なげもなく、すいっと難所を乗り切ってしまった。とあるが、ここでの「危なげもなく」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

A 不安を感じさせる様子もなく

I 何ら警戒するそぶりもなく

ウ 注意を促そうとする暇もなく

E 恐怖を表現する余裕もなく

〔問5〕 (5) この驚きは二五〇〇年来、すこしも変わっていない。とあるが、ここでいう「この驚き」について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

A 安全な立場に身を置こうとしている人間が、人生の難局をしるぐには時に無謀で危険な行いも必要になるのだと知ったときの驚き。

I 自分の能力に自信をもっている人間が、世の中には一見非力に見えても自分以上の能力をもつ者がいるのだと知ったときの驚き。

ウ 常識の枠で物事を考える人間が、人知を超えた自然の力に身をゆだねることで物事がかえってうまくいくのだと知ったときの驚き。

E 小手先の技術を身に付けた人間が、地道な努力を重ねることこそあらゆる困難が乗り切れるのだと知ったときの驚き。

平成21年度

解答用紙

国

語

1		める		められる		ける			
	(1)	眺める	(2)	懇談	(3)	褒められる	(4)	華麗	(5)

2					いた				
	(1)	ユメ	(2)	キエウニエウ	(3)	チエウヤ	(4)	ミチといた	(5)

3	(問1)		(問2)		(問3)		(問4)	
	(問5)							

4	(問1)		(問2)		(問3)		(問4)	
	(問5)							

5	(問1)							
	(問2)							
(問3)								
(問4)		(問5)						

(注) この解答用紙は編集上の都合により、
実物を約65%に縮小してあります。
153%の拡大コピーによりほぼ原寸大で
使用する事ができます。

配
点

1 (計10点)					2 (計10点)					3 (計25点)					4 (計30点)					5 (計25点)				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5
2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点

国 語

解 答

- 一 (1) なが (2) こんだん (3) ほ
(4) かれい (5) か
- 二 (1) 夢 (2) 牛乳 (3) 昼夜 (4) 導
(5) 複写
- 三 [問1] ウ [問2] ア
[問3] イ [問4] イ
[問5] (例) エンジが私を待っていてく
れる気持ちは分かったよ。あり
がとう。家に帰ったら新たな気
持ちでがんばるよ。(49字)
- 四 [問1] エ [問2] ウ
[問3] ア [問4] イ
[問5] (省略)
- 五 [問1] エ
[問2] 水に長じて水に安んずるは性なり。
[問3] (例) ようやく雨はやんだが、な
おも風は激しく吹いていた。
[問4] ア [問5] ウ

一 [漢字]

- (1)音読みは「眺望」などの「チョウ」。 (2)う
ちとけて親しく話し合うこと。 (3)音読みは
「褒美」などの「ホウ」。 (4)はなやかで美し
いこと。 (5)上から下にさげること。

二 [漢字]

- (1)音読みは「夢中」などの「ム」。 (2)牛の
乳。 (3)昼と夜。 (4)音読みは「先導」な
どの「ドウ」。 (5)もとの文書などと同じも
のを写しとること。

三 [小説の読解] 出典；橋本紡『永代橋』。

[問1] <心情> エンジの「永代橋を渡りたいん
だろう」という言葉は、千恵にとっては「ばっ
ちり」なもの、つまり、ひそかに期待していた
言葉でもあった。千恵はエンジと一緒に永代橋
を渡れることになったので、うれしくなってエ
ンジの気持ちを再確認した。

[問2] <文章内容> 千恵は、自宅に帰りたくな
いので、足取りが重くなっていた。その千恵の
気持ちを察したエンジは、遠回りをするために
いつもの散歩道を通り、千恵が少しでも余情を
感じられるように立ち止まって気遣った。

[問3] <表現> 千恵は、自宅に帰りたくないし、
エンジも、千恵の気持ちを理解しているが、二

人とももうすぐ別れなければならぬ。短い言葉の連続によって永代橋を渡ることを確認する様子からは、別れがたい思いを断ち切ろうとする二人の気持ちが感じられる。

〔問4〕〈文章内容〉エンジは「気が向かなかつたら来なくていい」と千恵に言ったものの、千恵が自分に会いたがっているとわかっている。しかし、親元を離れて自分の所に来ることを、あからさまには勧められない。だから、「俺はずっとここにいる」とは言ったが、いつでもここに来ていいという言葉までは、口に出せなかった。

〔問5〕〈心情〉千恵は、エンジが自分を待っていてくれることを、直接的に口に出さなくても、「俺はずっとここにいる」という言葉から十分に感じていた。だから、エンジにその気持ちはわかっているということ伝え、自分の家に帰ってからも元気でやっていくということ、言葉にして伝えたと考えられる。

四 〔論説文の読解—芸術・文学・言語学的分野—言語〕 出典；大庭健『いま、働くということ』。〈本文の概要〉ミツバチは「8」の字のパターンを用いた記号のコミュニケーションによって協業を行う。しかし、記号を用いた動物のコミュニケーションは、言語を用いた人間のコミュニケーションとは、根本的に異なっている。記号を用いた動物のコミュニケーションが実際に起きていることしか伝えられないのに対し、言語を用いた人間のコミュニケーションは語の組み合わせによって、実際には起きていないことも伝えられる。人間のコミュニケーションは、実際には存在しないものでも思考の対象として呼び出すことができるので、過去や未来のことについても思考を交換でき、動物とは全く異なった協業を行える。人間は、動物のように現在だけを生きるのではなく、過去から未来への歴史を生きているのである。

〔問1〕〈文章内容〉働きバチにとって「8」の字のパターンは餌のある場所を示すための記号といえるので、人間だけが記号を用いて協業しているわけではない。

〔問2〕〈文章内容〉人間は、相手の思いや意図を推測しながらコミュニケーションを進める。しかし、動物の記号的なコミュニケーションは、「一定の対象を認知したら、ある定まった行動をするというプログラム」に基づいて自動的に生じるので、相手の思いや考えとは無関係にコ

ミュニケーションが行われている。

〔問3〕〈段落関係〉人間の言語は、ある語に別の語が加わって初めて確定的な意味をもつようになっている(…第四段)。だからこそ、語を自由に組み合わせて任意の文を作れるので「実際には起きていないことについて考えることもできる」ようになる(…第五段)。第四段で述べた言語の基本的な内容を前提にして、第五段では人間の言語の特性の発展的な内容について述べている。

〔問4〕〈文章内容〉動物の記号的なコミュニケーションでは、事実しか伝えることができないので、過去を回想したり、未来を予測したりはできない。これに対して、人間の言語によるコミュニケーションでは、実際には存在しないものまで思考の対象にできるので、「人間は、過去・未来のものごとについて、共に考えることができる」のである。

〔問5〕〈作文〉人間は、日常的に、実際に存在していないもの、過去や未来について話し合うことができる。このような言語によるコミュニケーションの性質をふまえ、自分の経験を通じて考えてみよう。

五 〔説明文の読解—哲学的分野—哲学〕 出典；加島祥造『現代人の内なる老子と孔子』。

〔問1〕〈文章内容〉男は、魚でさえ泳ぐことができない川で、自分がどうやって泳いだのかを孔子が知りたがっている、と気づいた。だから、「別に特別の方法なんてありませんや」では、孔子の知りたいことに答えていないと思い、説明をつけ加えたのである。

〔問2〕〈漢文の内容理解〉男は、「水に長じて」いたから水を安全だと思うのは自分の「性」だと言っている。

〔問3〕〈語句〉この部分の「なおも」は、それでもまだ、それでもやはり、という意味。

〔問4〕〈語句〉「危なげ」は、見るからに危なそうな、という意味。息子のカヌーは、見ている人たちに危ないなどと感じさせることもなく、難所を乗り切ったのである。

〔問5〕〈文章内容〉少年は「水の自然力」に任せ、滝の男は「水の力と自分に備わる自然の性質を知って水」に任せたので、大きな力を発揮できた。一般常識人である父親と孔子は、自然の力に身を任せることで、常識では考えられないことが起こるものだ、と驚いたのである。